或ハ迷走神經抑制枝切斷ノ價値ニ關スル實驗的批判 狹心症ニ對スル外科的療法トレテノ交感神經切除術

Experimental criticism of the volue of sympathectomy or section of depressor nerve

as the surgical relief for angina pectoris.

By Dr. S. YOSHITOMI.

From the orthopaedic clinic of the medical faculty of the Köyto Imperial University. (Prof. Dr. Hiromu Ito.)

京都帝國大學醫學部整形外科教室(指導

第三項、心臓及大動脈起始部ニ加ヘタル人工的疼痛刺截感覺表現ノ 徴候 吉 富 IF.

述

五、四、結討 第四項、呼吸運動測定 第六項、呼吸測定及痙攣運動觀察ノ所見及考察 第五項、痙攣運動觀察 主要文献 歐文抄錄

三、實驗成績 二、實驗目的

B

次

第一項、血壓測定

甲、頸部交感神經刺戟

八九九年狹心症ニ對スル外科的治療法トシテ Frank ガ心臓及ピ大動脈ニ分布スル神經ノ解剖學的見地ヨリ頸部交感

蓍

吉

原原

富

緒

論

第二項、血壓測定ノ所見及考察

丙、迷走神經刺戟 乙、迷走神經抑制枝剌戟

固

路 神經節狀索ヲ摘出スルコト ル放散性疼痛!傳達經路ガ頸部交感神經節狀索及ビ是ニ相當スル脊髓神經ノ後根ナルコトヲ ヲ遮斷スル = |-= ョリ本症發作時ノ苦痛ヲ除去シ得ベキコトヲ主張セリ、而シテ同氏ノ此主張ヨリ遅ル、コト十七年、 ノ合理的ナルヲ唱導セシ以來晩近是ガ研究頓ニ旺盛ヲ極ムルニ 至レリ、卽チ氏ハ狭心症 指摘シ其ノ 求心性知覺經

同側星芒神經節ノ切除ヲ行ヒ好果ヲ得タルコトヲ報告セシ以來本症ニ對シ此ノ手術ヲ施行スルモノ續出シ (1924) Mont and Friedrander (1924) sénèque (1924) Arnold (1924) Lewit (1924) Plath, Tuffier, Bacon, Coffey, Brüning, Damelopolu

九一六年初メテ人體ニ本手術ヲ施行セルハ Jonnesso ナリ、即チ氏ハ一例ノ同症患者ニ左側頸部交戯神經節狀索ト共ニ

Eckstein (1924) ハ術後八日目ョリ顔面及肩胛部ニ疼痛ヲ發シ漸時增强シニケ月半ノ後ニハ顔面ノ麻痺途ニハ上半身ノ知 Kappis, Kümmell, Flörcken 等何レモ本手術ニヨリ其大多數ノ例ニ於テ良好ナル結果ヲ得タルコトヲ報告セルモ Mont and

因ヲナスモノニシテ手術ハ心臓ニ對シ何等危険ヲ伴ハザルモノナリト主張セリ、且ツ同氏ハ頸部交感神經節狀索摘出 覺障害ヲ來セル例ヲ報告ス、Brüning ハ本手術ヲ行ヒタル後ニ不幸ノ轉起ヲトルモノハ旣ニ存在スル心筋ノ疾患ガ其 卜同 ブル原

時二

頸動脈及脊椎動脈壁交感神經切除術ヲ並用ス可キコトヲ推奬ス。

ルコトヲ主張スル學派アリ、一九二三年 Wien ノ獨逸內科學會ニ於テ狹心症ノ發作ハ大動脈痛 (Aortalgie) ニ起因スルモ

斯クノ如ク交威神經切除ノ効果ヲ主張スル一派ノ學者ニ對シ他方迷走神經抑制枝ノ切斷モ 亦狹心症發作ニ

對シ有効ナ

患者ニ本手術ヲ行ヒ左側抑制枝切斷ノ一例ハ九ケ月ニ及ブモ發作ノ再來ヲ見ズ左右兩抑制枝切斷ノ二例ハ 四ヶ月後ニ 實へ既ニ其以前英國ノ學者 Clifford-Albutts ニヨリ唱導セラレタル所ニシテー九二四年 Eppinger ハ此見地ニ基キ五例 ノナレ バ大動脈ノ知覺神經トシテ知ラレタル抑制枝ノ切斷ハ本症治療1目的ニ適合セルモノナルコトヲ主張セリ**、此ノ事**

ŋ ŀ 報告シ :神經ヲ傷害シテ後死亡セリト報告ス、其他 Hofer (1924)ハ同症八例ニ就キ本手術ヲ行ヒ三例ハ輕快シ五例ハ全治セ Odermatt 亦自己ノ手術成績ニ基キ抑制枝切斷ノ有効ナルコトヲ説ケリ Flörcken ハ狹心症ニ對シテ迷走神經

ルモ何等本症固有ノ疼痛ヲ來サズ他ノ二例ハ術後日未ダ淺クシテ經過ヲ報告スルニ至ラズ 只一例ニ於テノミ 手術ノ際上

感神經 枝卜 切除ヲ行 頸部交風神經節狀索ヲ共ニ切除 ノ迷走神經抑制枝切斷 ヒ大動 脈 痛ヲ催起スル狭心症ニ ヨリモ有効ナリト斷言セリ、 スベ キ コトヲ推奬シ Glaser ハ叉冠狀動脈ノ痙攣ニ由來スル狹心症 Borchard 亦之三賛シ Sénèque ハ交感神經節狀索 對 シ 摘出 テ ハ交

對シテハ抑制枝ノ切斷ヲ行フ可キモノナリト説ケリ。

不足 ラレザルガ ヲ除去スル 斯 如ク w 爲メニハ心臓ョリ發スル求心ノ神經系ヲ遮斷スベ 爲メナリ、今左ニ是等ニ關スル現時ノ諸説ノ大要ヲ記セ 狭心症ニ ŧ 1 ナ リト 對スル手術方法ノ區 シ心臓ノ 働作ト血 流トノ間ノ均衡 ヤタル ハ畢竟本症 ハ冠狀動脈ノ ノ本態並ニ之ガ疼痛傳導ノ求心經路及遠心經路 キモノナリト ントス。 Daniélopolu 痙攣ニョ 稱シ り破壊セラル、 Müller 又貧血障害ニ對スル ハ發作ノ原因ヲ冠狀動 Æ ノ ニ シ テ 心筋 發 未 作 タ* 嵵 感覺 確 疼 斻 37. 痛 流

Jonnesco ガ頸部交感神經節狀索摘出ヲ行ヘルハ前述セルガ如シ、 シ シ 九九年本症發作時疼痛傳達路ノ頸部交感神經及ビ是ニ連結 鋭敏ナルコ テ、コ 事實ナリ 4 v 大動脈起始部ノ重要ナル求心性神經トシテ ハ同部ノ黴毒性病變ノ爲メニ强キ膨滿及伸展ヲ來ス爲 ŀ ŀ 説キ ヲ述べ Odermatt ハ心臓ヨリ中樞ニ向ヒ知覺刺戟ヲ傳達スルハ交威神經ニヨリ行ハル、モノナ Hucherd, Mackenzie 共二心臓ノ貧血ノ爲メニ本症ノ誘發セラル Ludwig 及 セル脊髓神經後根ナル ('yon メニ 然ルニ Wenkebach ハ本症ノ發作ハ大動脈 一催起セ ニョリ ラル、 發見セラレタル Æ 3 1 ŀ • ナレ ・ヲ述べ 7 ŀ ۰ ヲ認メ 迷走神經抑制 其ノ疼痛刺戟ヲ 之が刺戟傳達 Frank 枝ヲ完全ニ ۸ 午髓 遮斷 根部ノ 旣 jν = 遠ク一八 ŀ 疼痛 傳 目的 ۱ر 衆知 切 漟

七

IJ Æ ラ 症 鱁 ス ノナ Ú トハ必ズシモ同一ナル w 心臟 壓 = ŀ 1 昻 ヲ 得 非ズシテ先ヅ大動脈 從テ其療法ト 進ヲ伴 ハ最近本症ノ原因ヲ(一)、冠狀動脈 疼痛い即座ニ フト 否 ŀ ŧ テ 1 = ۲ æ 關係ナク 消散スベシト説キ 痙攣ヲ鎮靜セ 起始部 ハ限ラズ疼痛 且ッ「モ ニ發シ冠狀動脈 シ ト關係ナク經過スル狭心症 jν 厶 Echulmacher, Köster, Tachermak 等亦之ヲ認メ Vaquez, Echmidt 、ノ硬變ニヨル心筋ノ血流不足(二)、大動脈壁ノ黴毒性 ヒネ」ノ注 jν コト ハ二次的ニ侵サル 即チ血管收縮神經 射 = 3 リ疼痛 • アリテ本症 輕快 ŧ 切斷 ノナリト主張ス更ニ Pal ス = N 3 ŧ ハ血管痙攣ニョリ 發現 リ効果ヲ得ベ 發作ノ狀態 رر * 依然 Æ 病變ニ ハ大動 1 ŀ ナ ス ŋ テ jν 脈 3 ŀ 繼續 n æ 痛 硬化、 說明 等へ病 ノニ ト狭心 ス

11:30

原

富

宫

二四

buch 1主張スル如ク大動脈1伸展ニヨリ起ルモノニ非ズシテ却テ其收縮ニヨリ發現スルモノナリト同氏ノ說ヲ反駁シ 器質的心臟疾患、 (四)、 心臓及血管ニ何等病變ヲ伴 ハザル モノ • 24 種一 分類セリ、 ılli シテ氏 大動脈 痛

疼痛 腕ノ血管運動 戟ヲ脊髓ニ導キ其附近ニ存在スル脊髓神經中樞ニ之ヲ傳ヘコ、ニ於テ相當セル節 脈管壁交感神經切除術ノ並用ヲ推奬セルモノナリ。 痛ヲ誘發スル血管ノ痙攣性收縮ハ交感神經ニョリ支配セラル、モ ŀ シ テ發現ス 機能 jν ノ中樞ニ移行シ從テ同部ノ血管ニ痙攣ヲ來シ爲メニ左腕ノ疼痛ヲ催起スルモノ ナリトノ 自己ノ新説 Æ ノナリト説明サレタレドモ Brüning Head 及 Mackenzie ニ依レバ發作時ノ疼痛ハ交感神經 ハ心臓及大血管ヨリ發生スル疼痛刺戟ハ星芒神經節ニ於 ノニシラ是ガ所置トシテ (Segment) ノ分布區域即チ左腕其他 頸部交感神經節狀索ト 共 リ其 デカ ラ刺 ヲ

記載ニ乏シク獨リ 次 本症發作時 ノ血壓ノ變化ニ關シテハ一 Brüning ハ氏獨特ノ方法ニョル研究成績ヲ報告セリ、 般ニ其上昇ヲ認メラレ居レドモ其因ラ來ル本態ニ 即チ同症疼痛發作時ニハ常ニ著 關シテハ 比較的 シ 7 m 詳細ナル 壓ノ 上昇

主張

正常 t ヲ 壓ノ曲線ヲ描寫シ交感神經ノ切除ニヨリ既ニ其直後ニ於テ相當ノ血壓下降ヲ證明シ三週間後ニ至レバ 血壓上下ノ 變化 伴ヒ發作ノ消散ト共ニ正常或ハ其ノ以下ニ下降ス、而シラ此ノ血壓上昇ハ發作ノ初メニ催進反射ヲ皷舞 シ 4 狀態ト殆 jν モノ シテ其ノ原因ハ血管痙攣ヲ以テスルニ非ザレバ説明困難ナリト報告ス、氏ハ同症患者ニ就キテ其前後 ンド差異ヲ認メザ w = 至ル ト稱シ且 ツ本症 一對 ス ル手術的効果ハ疼痛 ノ輕快ト共ニ 主要ナル 要素ヲ形成 シ テ血 歴ヲ Ŀ Ú.

テ之ヲ以テ考フル ス 發作時ノ症狀ヲ増强セシ 三神的ニ或ハ直接ニ心臓働作ヲ催進セ モノニシテコ = **交感神經節ノ摘出ニョ** 血壓ノ上昇 ムル æ ハ血管ノ積極的機能ニ關係アルコ ノナリト主張 シ メ血壓上昇及ビ大動脈壁ノ緊張ヲ昻進 リ血管ノ收縮機能ヲ絕滅シ其ノ痙攣ヲ惹起シ得ザル ス。 ŀ ヲ知ルヲ得べ 七 シト述ベタ シメソ v y = = 3 Wenkebach リテ 至ラシメタ 同時 ル 結果ニシ 又疼痛其他 疼痛 ア襲來

戟説ト大動脈起始部ノ病變ニョリ發現スル刺戟症狀ナリトノ兩説ニ分ル、モノ、如ク其ノ原因ノ何ニ依リテ 來ルカヲ 問 何レ Æ 本症 こ固有ナル放散性疼痛ヲ主徴トシ之ニ隨伴スル血壓ノ昻進ヲ見ルモノ、如シ、而シテ前者ニ屬スル學者

ズ

頸部交感神經節狀索切除ノ有効ナルヲ說キ後者ハ迷走神經抑制枝ノ切斷ニョリテ治療ノ目的ヲ達セントスルモノ、如シ。

二、實 驗 目

的

雖モ是等ハ皆其ノ基礎ヲ臨床上ノ假説ニ置キテ論議セルモノニ w 相互關係ニ關シラ實驗的ニ直接之ヲ證明セルモノニ非ズ。 以上ノ臨床諸家ノ文献 ョリ觀察スルニ單ご手術ノ効果ヲ報告スルニ止リ其ノ本態ニ就キテハニ三説明 シテ狭心症ト交感神經或ハ迷走神經抑制枝トノ 間ニ 於ケ ス N Æ 1 7 リト

經 走神經抑制枝 或い抑制枝 余ハ是等兩神經 ノ切斷ニョリ疼痛消失ノ有無ヲ檢シ兩神經各自ノ作用及ピ相互關係ヲ明カニシ 以テ叙上ノ 手術的効果及臨 ノ血壓ニ對スル生理的作用ヲ明カニシ次デ心臟或ハ大動脈起始部ニ人爲的疼痛刺戟ヲ起サシメ 次デ 交感神 對スル手術的所置ノ効果ヲ實驗的ニ批判セ ントシ健康ナル家兎ヲ用ヒ先ヅ 其ノ 頸部交感神經 直或へ迷

就 床上ノ假説ガ果シテ正鵠ヲ得ルモノナリヤ否ヤヲ檢セントシテ以下ノ實驗ヲ行ヘルモノナリ。而シテ本手術効果ノ本態 キラ從來報告セラレタル諸家ノ見解ト聊カ異ナレル結論ニ到達セルヲ以テ今其ノ概要ヲ茲ニ報告シ 識者ノ 批判ヲ仰ガ

三、實 驗

成

繬

ŀ

スルモノナリ。

M 壓 測

定

交感神經節狀索、迷走神經抑制枝及迷走神經等ヲ各明瞭ニ分離シ得ルガ爲メナリ、先ヅ 最初ニ 心臓及大動脈 N 諸神經 ノ血 壓ニ對スル生理的作用ヲ檢セントシ試獸ノ體重一酐ニ對シ「ウレタン」ヲ○・四ノ割合ヲ以テ皮下ニ注射シ 原原 老 吉 富 (第武號 三五 起始部

分布

實驗動物トシテ總テ健康ナル家兎ヲ使用セリ、コレ家兎ノ頸部諸神經ハ解剖的關係ニ於テ比較的人體ノソレニ近ク頸部

ミニナ

(第貮號

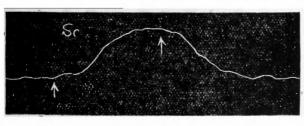
二さ

分離シ置き頸動脈ニガラス製「カニユーレー」ヲ挿入シ之ヲ濃厚硫酸「マグネシユム」溶液ヲ滿シタル「ガラス」管ニヨリ水

輕キ宇麻睡ノ狀態トナシ頸部正中線ニ於テ喉頭部ヨリ胸骨上端ニ亘ル切開ヲ加へ交感神經、迷走神經抑制枝及迷走神經ヲ

銀「マノーメター」ニ導キ前記各神經ヲ感傳電氣ヲ以テ刺戟シ其ノ曲線ヲ媒烟紙上ニ畵カシム。

血壓第一圖、頸部交感神經ヲ其儘刺戟シタル場合 血壓第二圖、頸部交感神經ヲ切斷セル場合



S

血壓第三圖、頸部交感神經切斷後其ノ中樞端ヲ刺戟セル場合

富

(二)、頸部交感神經幹ヲ下神經節ノ上方約

=

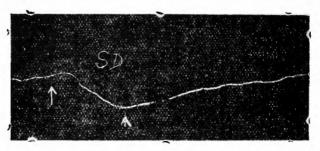
一刺戟シ

Þ w

タニ上昇シ刺戟ヲ中止ス (甲)、頸部交感神經刺戟 (一)、頸部交感神經ヲ其儘 jν

Sp

血壓第四圖、頸部交感神經ヲ切斷シ其ノ未梢端ヲ刺戟セル場合



血壓第五圖、頸郎交感神經及迷走神經抑刺枝ヲ共ニ其儘刺戟セル場合



血壓第六圖、頸部交感神經及迷走神經抑刺枝ヲ共ニ切断 シ其ノ兩中樞端ヲ刺戟セル場合

ト共ニ再ピ徐々ニ下降シ略刺戟前ノ高サニ返ル 場合ノ血壓ノ變化ハ第一圖ニ示ス如ク 一糎ノ部ニ於テ切斷スルモ第二圖ニ見ル如キ何等曲線 刺 戟後僅カ (第重號 間 ニ髪化ヲ呈セズ。 隔ヲ ニセ) 置 曲線

ナ n

+ ラ

٨٠ 徐

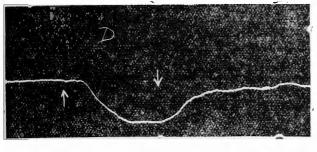
第参卷 原原 晝

圖

樣

べ。

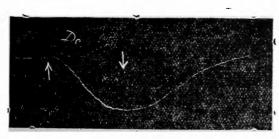
四, 刺戟後僅カノ時間ヲ經テ徐 頸部交感神經ヲ下神經節ノ 領部交感神經ヲ前者 K 樣



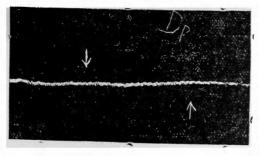
血壓第七圖、迷走神經抑刺枝ヲ其儘刺戟セル場合



血壓第八圖、迷走神經抑制枝ヲ切断セル場合



血壓第九圖、迷走神經抑制枝ヲ切斷シ其ノ中樞端 ヲ刺戟セル場合



血壓第十圖、迷走神經抑制枝ヲ切斷シ其ノ末梢端 ヲ刺戟セル場合

= 上昇シ 上方約 刺戟ヲ停止スレ

糎 ノ部

ニ於テ切斷シ

其

7 中

樞端ヲ剌

戟スル場合ノ血壓曲線ハ、第一

圖

ŀ

略同

٧٠ 再ピ

僅カノ

間隔後徐々二下降シ刺戟前ノ高サニ返ル、

ŀ

同

= 切斷

シ

其末梢端ヲ

刺戟

ス w

ŧ 第四

圖

= 示 ス

ガ

如 7 血

壓 曲 線 = 認

ム可キ變化ヲ呈セ

三二九

(第武號

二九

第

=

= 刺 戟 ス

w

辟

ĺП

線

下

降ス

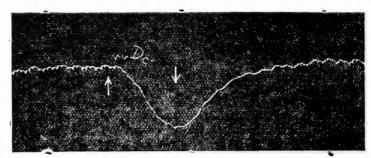
V

۴. æ 左記

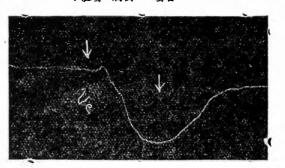
=

抑制枝ノ

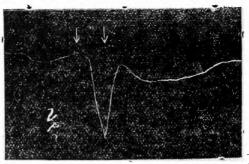
頸部交感神經及迷走神經抑制枝ヲ共ニ切斷シ 後者ノ中樞端ヲ剌戟セル場合



血壓第十二圈、 迷走神經幹及迷走神經抑制枝ヲ切斷シ後者ノ 中樞端ヲ剌戟セル場合



血壓第十三圖、迷走神經ヲ切斷シ其ノ中樞端ヲ剌戟セル場合



血壓第十四圖、迷走神經ヲ切斷シ其ノ末梢端ヲ刺戟セル場合

第多卷

「原

73

三三〇

(乙)、迷走神經抑制枝刺戟

刺戟ヲ中止スレバ再ピ同樣ノ間隔ノ後ニ上昇ヲ始メ下行曲線ト略同角度ヲ以テ上昇ス。 (七)、迷走神經抑制枝ヲ其儘ニ刺戟セル場合ノ血壓ノ變化ハ第七闘ニ示ス如ク 刺戟後僅 カナル時間ヲ 經テ下降ヲ始メ

(八)、迷走神經抑制枝タ切斷スルモ何等血歴曲線ニ變化ヲ來サズ。(第八鬪)

(九)、迷走神經抑制枝ヲ切斷シ其ノ中樞端ヲ刺戟ヌル場合ノ血壓曲線ノ變化ハ同枝ヲ其儘刺戟セル 場合ト 略同樣ニシ

テ卽チ刺戟ニヨリ下降シ刺戟ヲ中止スレバ上昇ス。(第九圖)

(十)、迷走神經抑制枝ヲ切斷シ其ノ末梢端ヲ刺戟スルモ血壓曲線ニハ何等變化ヲ呈セズ。(第十圖)

(十一)、豫メ頸部交感神經ヲ切斷シ置キ迷走神經抑制枝ヲ切斷シ其ノ中樞端ヲ 刺戟セル 場合ノ血壓曲線ノ變化ハ單ニ

迷走神經抑制枝ヲ切斷シ其ノ中樞端ヲ剌戟セル場合ト略同樣ナル下降ヲ示ス。(第十一鬪)

(十二)、豫メ迷走神經ヲ切斷シ置キ抑制枝ヲ切斷シ其ノ中樞端ヲ刺戟セル場合ノ血壓曲線ノ變化亦同樣ナリ。(第十二

圖

(丙)、迷走神經刺戟

(十三)、迷走神經ヲ切斷シ其シ中樞端ヲ刺戟スル揚合ハ血壓ハ徐々ニ下降シ刺戟ヲ 中止スレバ 再ピ徐々ニ上昇シテ舊

位ニ復ス。(第十三闘)

シ舊位ニ復ス。(第十四圖 (十四)、迷走神經ヲ切斷シ其ノ末梢端ヲ 刺戟スル場合ハ 血壓ハ急激ニ下降シ刺戟ヲ中止スレバ曲線ハ鋭角ヲ以ラ上昇 (未完)